

井上靖の『氷壁』が出版されたのは既に60年近くも前のことだったので、若い方々は或いはご存じないかも知れない。厳冬期の前穂東壁で実際に起こったナイロンザイル破断事故に想を得て、ザイル破断によって遭難死したザイルパートナーとの山での友情やザイル破断の真相解明を縦糸とし、その岳友の憧れの女性を巡る街での恋愛確執を横糸にして描いた山岳フィクションであった。登山ブーム勃興の時期とも重なり、朝日新聞の連載小説でもあったことから読者の目には新鮮に映ったことだろう。風見武秀の風雪テントの箱装幀写真と棟方志功の扉・表紙の文字も当時としては極めてユニークな装幀となっていて世間の耳目を驚かせた。また、何回も映画にもなった。時代設定を現在に、場所を前穂からK2に変えて10年ほど前にNHKの土曜ドラマでも放映されたので、覚えておられる方も多いであろう。

さて、この『氷壁』は各自でお読み頂くとして (今でも新潮文庫版にあり)、この小説の基になった“ナイロンザイル破断事件”は昭和30年に実際に起こった。即ち、それまでのザイル (今でいうクライミング・ロープ) は麻製のザイルであったが、この頃から麻よりも強度が数倍強くしかもしなやかで低温にも適すると言われたナイロンザイルがボツボツと出回り始めていたのである。しかし、ナイロンザイルは非常に高価であったので、40年程前までは依然麻ザイルが主流であった。

写真の右は私が50年前に使っていた麻ザイル、左側は現在使っているクライミングロープである。両者は太さ、重量、しなやかさに決定的な違いがある。

麻ザイルは径が14^ミもあるゴワゴワのロープで、現在のような編みではなく**撚り**であった。目方も非常に重いので、長さは30mに押さえられていた。しなやかさが無いので途中にカラビナ2本も通せば、重くて重くてザイルを引けなかった。また、雪中では麻の繊維の間に雪が入って凍り、棒のように硬くなって途中で折れるのではないかと思えた。雪山では凍結を防止するためにワセリンや亜麻仁油を塗ったので、いつもヌルヌルしていて気持ち悪かった。



当時は今のようなクライミングギアなどは無く、ハーネスも無かったので、身体へのザイル連結はブーリン・ノットで腰に巻いただけのものだった。ゼルブストザイルという今でいえばウェストベルトのようなものもあったが、結構高価であったので使わなかった。確保器や懸垂器なども無かったので、確保は肩絡みや腰絡みで行い、懸垂は股絡みで下った。長さが30mしかなかったので、ピッチも今の半分程度で切らなければならなかった。シュリングなどというシロモノもなく、細引きで捨て縄なども作った。私などはお呼びではなかったが、このような貧しい道具で、しかも靴は重登山靴で谷川岳などの岩壁ルートを開拓した先駆者の苦労を偲んでみるのも悪くなくろう。次回は登山靴の予定。(おおつか)